

# 新建 ルビツグ THE SHINKEN HOUSING

8月10日(火) (第309号) 新建新聞社 毎月10.20.30日発行 購読料全:月額2100円  
東京 千104-0031 東京都中央区京橋2-6-6 藤木ビル TEL(03)5524-1604 FAX(03)5524-1605  
長野 千380-0836 長野市南県町686-8 TEL(026)234-1211 (編集) FAX(026)234-1130

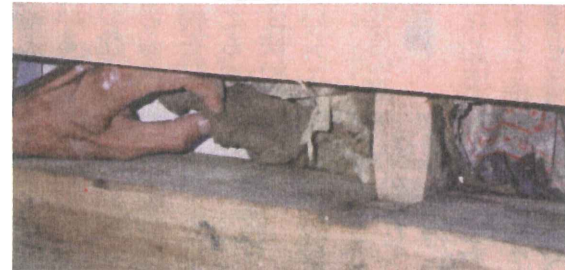
購読・広告の申込みは ☎0120-47-4341 HPは <http://www.s-housing.jp>



家屋から持ち出された断熱材しぼると泥水が落ちてくる

## 新潟県中部の 7.13豪雨災害

7月12日から19日にかけて記録的な集中豪雨が新潟・福井・福島の3県を襲い、河川の堤防が決壊して大きな被害を引き起こした。なかでも新潟県中部の三条市・中之島町を中心とした「7・13豪雨災害」は家屋の全半壊もさることながら、長い間家屋が泥水につかることにより「水に弱い家電や新材が使用のものにならない」という事態を招いていた。被災から半月たった7月末に三条市・中之島町を訪ね「泥水につかった家屋はどうなったか」ルポした。



泥水を吸って原形をとどめないグラスウール

# 使いたくなくなってきた面材・下地材 ベニヤ板・パーティクルボード・MDF グラスウールも入れ替えが必要に

### グラスウールの 入れ替えが悩み

今回の水害で「乾燥させてそのまま使うか、入れ替えなければならぬのか」悩みとなっているのが断熱材のグラスウール、ロックウール。両市町は「グラスウールやロックウールの断熱材が圧縮されると断熱性能が半減する」といいますが、その断熱材も泥水につかり泥水を吸いこむという異常事態におかれ「繊維や空気層が空気のかわりに水分を含んで溜め、その水分がそのまま残ってしまう」ケースを生んだ。断熱材を取り出して手で絞ると泥の混じった水がドットと落ちる現象がアチコチで見られた。

両市町や三条市設計協同組合(山田昭信組合長・19社)、同建築組合(梅田均組合長・110社)などでは「床下や壁の中をとにかく時間をかけて乾燥させて」と呼び掛けてきたが、いったん水を含んだ断熱材はなかなか水分が抜けないのが実情という。

このため、「予算が許すなら断熱材を入れ替えた方がいい」と被災者に話すようにしている」と建築組合の梅田さん。ところが年金生活のお年寄りには「生活必需品の家電製品の買い替えも迫られお金の余力がない。とても家屋の改修まで手が回らず、改修しないでそのまま使いたい」という相談が多い(設計組合の山田さん)というのだ。こうした悩みは今のところ消えそうにない。

### 水害に強かった 羊毛断熱材

今回の水害に強みをみせた断熱材もあった。羊毛断熱材がそのひとつ。数はごくわずかだが、最近の住宅には使われるケースもでてきた。昨年新築したS邸もその一例。

S邸の内壁を剥いで中をみると「泥水を吸った羊毛はその泥水が下に流れて床のところにとまっていた。上の部分は乾いて泥も水分といっしょに下に流れたようできれいだった」(S夫人)。

このため「下の一部分だけカットして取り替え、上はそのまま生かす」という修復工事で済むことが分かり、S夫人は

「昨年買ったキッチンセツトや大型冷蔵庫もダメになったし、エアコンの室外機もイカれてしまった。生活必需品の買い替えで大きな出費があるなかで、修復工事の費用が少なく済むことは不幸中の幸いだ」と話す。

その羊毛断熱材をS邸に納めた新潟センチュリ(株)(新潟市)の坂上泰三さんは「ウール(自然素材)のもつ力を改めて実感した。初期の投資は少しかかっても今回のような水害が起きると返って安上がりなる。住宅も一生のなかでなにが起るか―その時に備える意味でもムクの木や自然素材を見直すとき」と指摘する。